

野鳥会報

No.79 2015年 3月発行

日本野鳥の会新潟県

鳥のいる風景 オオモズ *Lanius excubitor*



秋も深まり、そろそろ里にも初雪が降ろうかという11月の終わり頃。いつもの探鳥コースをはずれ、妙高市北条の田んぼに足を延ばした。ノスリやハクセキレイ、タヒバリなどを観察していると、道路わきの杭からひらりと舞い降りる鳥がいた。見ると舗装道路の上で何かをくわえている。白と黒の体色、モズのシルエット、もしやと思い再び杭の上に戻った姿に双眼鏡のピントを合わせた。30年ほど前に冬の奥日光で観察して以来のオオモズだった。カメラを取り出し撮影を始めると、何度か道路に降りては小さな昆虫を捕食している様子がうかがえる。しばらくすると、向こうから自動車が来たのに驚いて路上から飛び立つ

た。その時、翼に浮かぶ白い斑紋がくっきりと確認できた。刈田の上をそのまま低く飛び去る姿を何とかファインダーの中で追跡しようとしたが、ついに見失ってしまった。後日談がある。翌朝、この鳥を再び探してくれた方がいて、幸いにも私が観察した付近で発見できたとのメールが届いた。ところがまさにその直後、目の前でオオタカに捕獲され、あっという間に持ち去られてしまったようだ。雪の降る前の枯草色の田畑、その中ではオオモズの白と黒の姿は目立ち過ぎたのかもしれない。

(曾我 茂樹)

コムクドリの生活史を調べる ～3～

～繁殖時期と地球温暖化～

研究部 小池 重人

1. はじめに

コムクドリは日本の本州中部以北で繁殖し、冬季は東南アジアで越冬する夏鳥である(図1)。1978年から新潟市で巣箱を架けて産卵する時期や一腹卵数の調査を行ってきた。調査を始めて20年ほどたった頃、それまでのデータをパソコンで整理することにした。そして産卵開始日をグラフにしたときに、ある傾向があることに気づいた。なんと、年々早くなってきているようなのである。そこで、統計ソフトを使い解析してみたところ、明らかに早くなっていることが確認できた。そして、産卵開始日は新潟などの気温変化と関係があることがわかった。そこで、1998年の調査を終えた後、「イギリス鳥学会誌IBIS」に発表した(Koike & Higuchi 2002)。その後も調査を続け1978～2005年のデータで解析を試み、2006年には「地球環境」という国際環境研究協会・会報に発表した(小池・樋口 2006)。ここでは「地球環境」での内容を基に解説することにする。



図1. 4月に新潟に到着したコムクドリの雄と雌

2. 調査方法

コムクドリの繁殖時期調査は、新潟市で1978年から2005年まで実施した(1980～1984・1995年は調査なし)。毎年30～100個の巣箱を架けて産卵の調査をした。

そして、それぞれの年の初卵日の平均を産卵開始日として繁殖時期を示した。また、2～4月の3カ月間の平均気温(早春の気温)との関係を示した。気温は新潟市だけでなく、越冬地とされるボルネオ島のクタキナバルや渡りの中継地となる南西諸島・沖縄の那覇市との関係も調べ、産卵開始日の年変化や気温との関係を解析した。一腹卵数については、年変化や産卵開始日による一腹卵数の違いも解析した。

2. 産卵開始日の年変化

コムクドリの産卵開始日は年々早くなる傾向が認められた(図2)。最も遅い年は1978年の5月25日、最も早い年は2002年の5月4日であった。各年の産卵開始日(y)と年(x)の間には、 $y = -0.57x + 83.94$ (1978=0, Mar1=1)の有意な負の関係があり($R = -0.876$, $P < 0.0001$, $N = 22$)、産卵開始日が1年あたり0.57日、27年間で15.3日、半月も早くなっていた。また、それぞれの年の産卵開始日の標準偏差に減少傾向が認められたことから、繁殖期間は年々短くなっていることもわかった。つまり調査を始めた頃に比べ、最近ではあつというまに産卵する時期が終わってしまうのである。

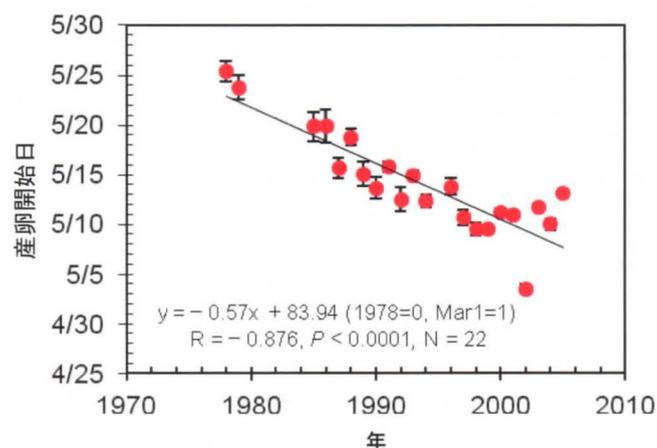


図2. コムクドリの産卵開始日の年変化(1978-2005)。(各年の産卵開始日と標準誤差)

3. 産卵開始日と早春の気温

産卵開始日と新潟市の気温との間には関係があることがわかった(図3)。気温が高い年ほど産卵開始日が高い傾向がある。また、産卵開始日は那覇市の気温とも関係があった。しかし、越冬地のコタキナバルの気温との間には関係がなかった。

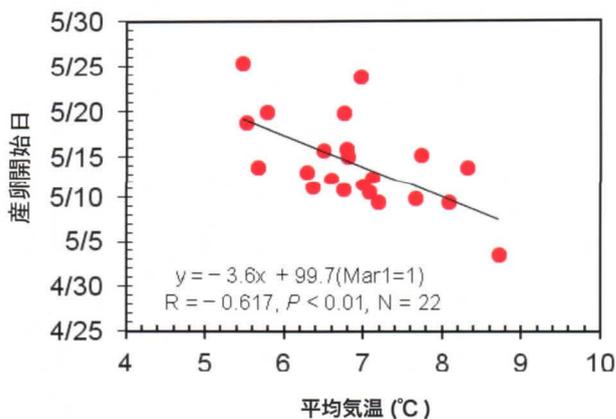


図3. 新潟市の早春(2月-4月)の平均気温と産卵開始日の関係(1978-2005)。

新潟市や那覇市の早春の気温は近年上昇している。新潟市は平均して年0.06°C、27年間で1.5°C上昇している(図4)。那覇市は、平均して年0.04°C上昇し、27年間で1.1°C上昇している。また、新潟市および那覇市の年平均気温も上昇している。一方、コタキナバルの2~4月の気温および年平均気温は上昇していない。これらのことから、コムクドリの産卵開始日が高まってきたのは、繁殖地や渡り途中の中継地において気温が年々上昇してきたことが原因であると思われる。

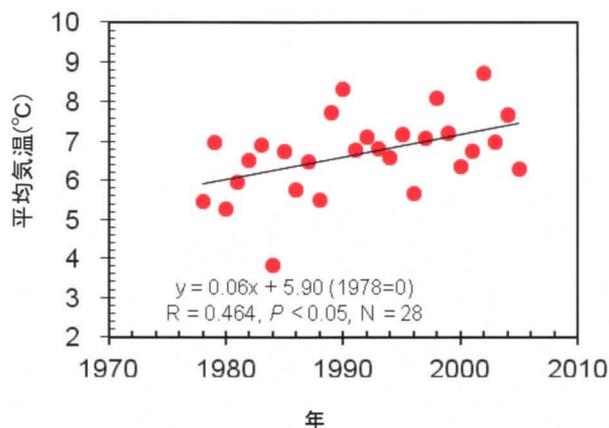


図4. 新潟市の早春(2-4月)の平均気温の年変化(1978-2005)。

4. 一腹卵数

一腹卵数は年々増加する傾向があった(図5)。1年あたり0.04個、27年間で1.03個増加した。一

腹卵数は1年の時期によっても変化する傾向があり、産卵開始日が高いほど多い傾向がある。例えば1991年には1日0.17卵ずつ減少した。年が違って同時期ではあまり変わらないので、産卵開始日が高い年には一腹卵数が多くなる。このように繁殖時期の早まりは一腹卵数を増加させる。

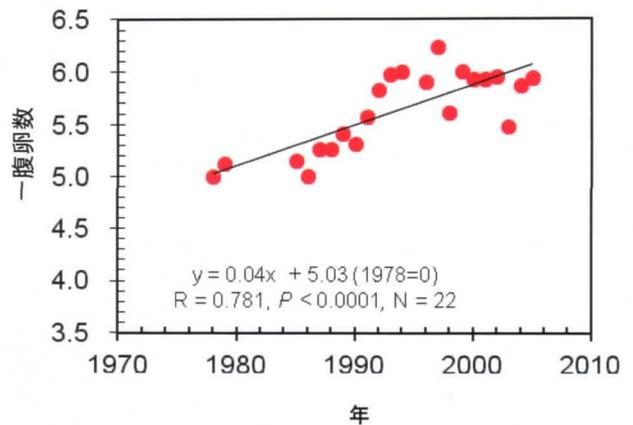


図5. コムクドリの一腹卵数の年変化(1978-2005)。

5. まとめ

繁殖時期が早くなってきたのは、繁殖地だけでなく沖縄など複数の地域の気温上昇、つまり近年の急激な地球温暖化が関係していると思われる。シジュウカラのような留鳥と違い、コムクドリのような渡り鳥の場合には、繁殖地だけでなく渡り中継地や越冬地などの気温も考慮して繁殖時期の早まりを検討する必要がある。

最近、ジオロケーターによる調査で越冬地がはっきりしてきた(小池ほか 2013)。今後、それを基に越冬地の気温との関係を詳しく調べてみようと思っている。もしかしたら、越冬地の気温も影響しているかもしれない。

引用文献

- Koike S & Higuchi H (2002) Long-term trends in the egg-laying date and clutch size of Red-cheeked Starlings *Sturnia philippensis*. IBIS, 144, 150-152.
- 小池重人 & 樋口広芳 (2006) 気候変動が同一地域の鳥類、昆虫、植物の生物季節に与える影響. 地球環境 11: 27-34.
- 小池重人, 土方直哉 & 樋口広芳 (2013) ジオロケーターによるコムクドリの渡り経路の追跡. 日本鳥学会 2013 年度大会講演要旨.

ハヤブサに魅せられて

柏崎市 末崎興助



初めてハヤブサの棲息を確認してから、すっかりその虜になってしまいました。それ以来、時間の許す限りハヤブサの観察を続けて参りました。

振り返ると早 28 年となりましたので、此の辺で取りまとめて見たいと思い立ちました。数多くのフィールドノート調べ乍らその時々々の事等を思い浮かべると、成功の○、失敗の×印の中にも様々な喜びや悲しみが積み重なって居ります。

ハヤブサの繁殖は中々大変な様で、毎年順調に繁殖出来るとは限りません。

抱卵を開始後 40 日、50 日と経過しても尚孵化せず抱卵を続けている雌の姿を見ているのは、何と

も忍びないものです。

2012 年営巣途中の卵 4 個が放棄されました。恐らく何か大きなストレスが与えられたのではないかと推察され、誠に残念で堪りません。2013 年はそうならない様にと念じ、早くから遠方より見守り続けて参りました処、此の地で初めて 1 羽の巣立ちが確認出来て大変嬉しく思いました。

最近では写真機材の発達やインターネットの普及が著しく、ハヤブサファンは増大しつつありますが、願わくはハヤブサの繁殖に悪影響を与えない様にして戴きたいと念じております。



ハヤブサの繁殖状況

A, C, E, F: 海岸部の繁殖地 ○ 成功 数字は営巣数
 B: 山間部の繁殖地
 D: 人工構造物の繁殖地 × 産卵もしくは孵化後失敗

地名 年度	A	B	C	D	E	F	特記事項
1986	×						初めてハヤブサの棲息発見
87	×		②				
88	①		④				
89	①		②				
90	×	①	×				Cの繁殖地は自然崩壊により消失した
91	①	①	×				Aで雛を捕えた仕返しにとびが2羽撃墜された
92	②	×			①		
93	①	×		②	×		Dで幼鳥2羽が巣立ちの際落下、これを保護して愛鳥センターへ。
94	×	④	×		×		
95	×	③	×	①	×		Dで幼鳥1羽落下したが親鳥が餌を運び無事巣立った
96	×	×	×				日本野鳥の会研究センターの調査が行われた
97	×	①	×				Aで交尾中のペアに若い雄が乱入して生んであった卵が放棄された
98	③	×	×				
99	③	①	×				
2000	×	④					
01	×	④	×				Aで営巣するも雨で水没し失敗
02	②	×					
03	②	×	×			③	
04	③	×	×				
05	×	×	×				Cで孵化するも1週間で失敗 Fで抱卵するも濃霧で失敗
06	×	×					
07	×	①					Bでいつもより1ヶ月遅れで1羽巣立った 7月16日の中越沖地震で海岸の繁殖地は大被害
08	×	①					
09	×	×					地震で崩壊したAの岩の脇で卵4ヶ確認されたが結局失敗した
10	②	×					
11	②	×					
12	×	×	×				Aで孵化したが3日目で失敗した Cで4卵が放棄された
13	×	×	①				Cで初めて1羽巣立った
合 計 1986年～2013年までの28年間で60羽の若鳥が巣立ちました							

初冬のミサゴの生態

～河川の捕食行動と生活～

魚沼市 桑原 哲 哉

I ミサゴについて

ミサゴ (*Pandion haliaetus*) は大きな魚を捕食して生きる猛禽類である。極地を除いて魚を捕らえることができる場所があれば広く生息しているタカ目ミサゴ科の鳥である。

日本では、瀬戸内海や湾口、河口、孤島、溜池などで観察例が多い。関東近郊などを除けば、ほぼ全国で繁殖が確認されている。

河川や湖沼、水辺の多い新潟県では、県北（荒川、加治川、三面川、胎内川、阿賀野川等）の水系や頸城湖沼群、信濃川流域、奥只見湖などの山地の湖沼・ダム湖などで生息している。秋の渡りのシーズンには南下する個体が観察される。

ミサゴの繁殖は新潟市、長岡市、県北など水系、刈谷田川流域、奥只見湖などで確認されている。

河川では2月から姿を見せ始め繁殖期に入る。繁殖地では11月には姿が見えなくなる。

今回は初冬期のミサゴの捕食行動について報告する。

II 生息地の環境

全長66.7kmの魚野川は信濃川最大の支流である。魚野川は群馬県境から魚沼市を南北に流れ長岡市川口で信濃川と合流する。

調査地は上流から50km程下った蛇行部の上流側である。川幅は120mあり、河川敷にはアシ原が群落をつくり、クルミやヤナギ等の樹木が河畔林を形成している。(図1)



図1 河畔林とクルミの梢に止まるミサゴと生息環境

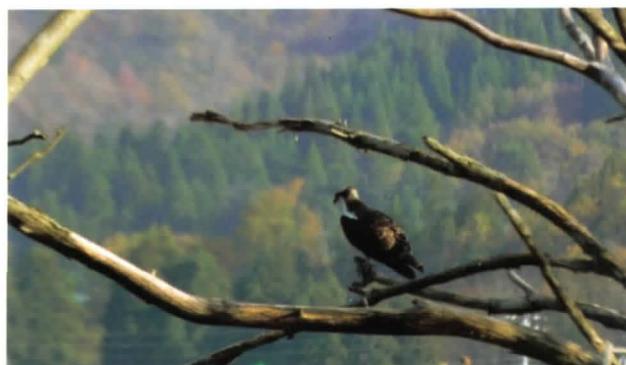


図2 晩秋の山々を背景にクルミの木にとまり獲物を狙うミサゴ

III 観察について

ミサゴが捕食行動に利用する止まり木はほぼ決まっている。(図2) 観察は定点から主に利用していた2カ所の止まり木を両川岸から調べた。

魚野川左岸の止まり木(クルミの木)と右岸の止まり木(電柱)の距離は直線で約1km、捕食行動が見られる行動範囲は流域に沿っておおよそ2kmである。

観察は10月27日から11月29日まで、のべ19日間調査を行った。ミサゴの捕食行動と、非繁殖期の行動範囲における観察を77時間行った。

IV 結果と考察

ミサゴの年齢や雌雄の識別は難しい。観察した個体は虹彩が黄色味がかっていること、胸の横帯の斑が幅広く濃く明瞭なことから、メス若鳥と推定した。

捕食行動は50回観察した。35回捕食に成功し成功率は70%である。終日観察の結果では、37回観察して22回成功した。成功率は59%で



図3 水に飛び込み2匹の魚を同時に捕まえたミサゴ

ある。

終日観察の成功率が低い原因は、激しい雨と水面の濁りのため、17回の捕食行動中8回の捕食成功に留まった日があることによる。

(1) 捕食行動の時間と回数

捕食行動の時間は一日の中で大きく二つに分かれ、午前6時30分～9時30分頃までと10時30分～午後2時30分頃に集中している。川霧が濃く視界が悪い時やみぞれまじりの雨が降る時でも、天候には左右されずに捕食行動が見られる。

魚の大きさによって異なるが、1匹平均10分程(大きな魚は20分)で食べ終わる。その後すぐに飛び立ち、4～8回連続して捕食する、一日に12～16匹の魚を捕食している。一度の狩りで2匹の魚を捕らえることも多く、今回の観察中3回見られた。(図3)



図4 橋の街灯からのダイビング

(2) 捕食方法と場所

川面を見下ろしながら丹念に探索し滑空やホバリングを繰り返して行く。獲物を発見すると上空でホバリングしてから水中にダイビングして捕食する。魚を狙うパーチング・ポイントとしてクルミの木や橋の街灯の上からダイビングする場合もある。(図4)

捕食場所は主に川の流域に沿って4カ所を狩り場とし、魚野川に架かる橋を中心にした500m以内で行われた。河川的环境構造は比較的浅い水面を利用することが多い。(図5)



図5 浅い水面での捕食シーン

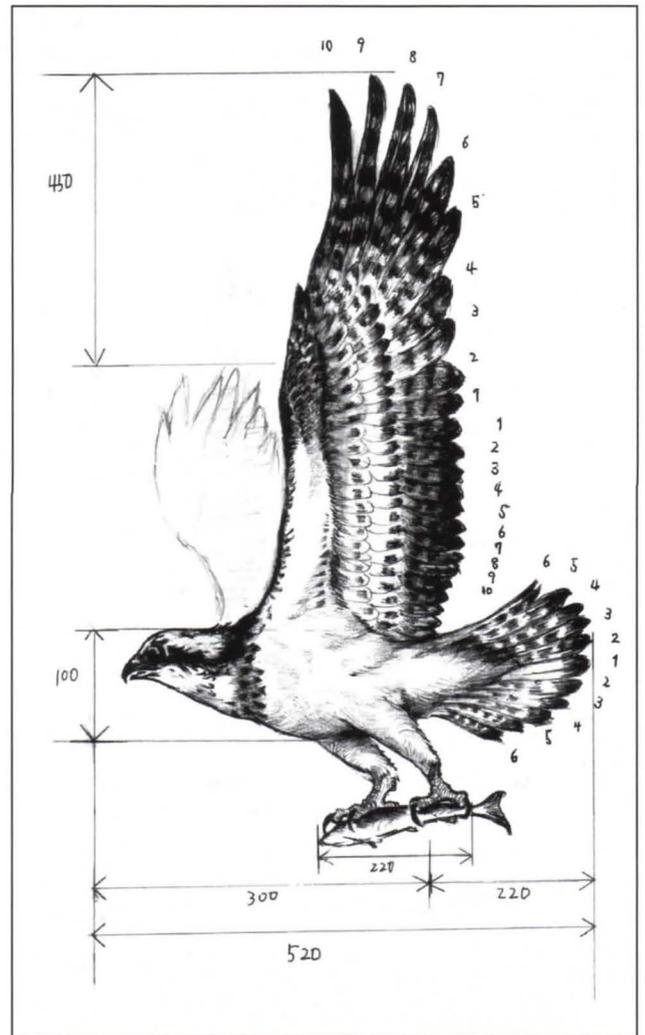


図6 魚を捕らえるミサゴの体型

(3) 捕食する魚種と大きさ

捕食した魚種は目視及び写真で行った。確認できた種類はアユ、コイ、ウグイ、ニジマス、ヤマメである。ミサゴは捕食可能な魚であれば魚種は問わず、何でも捕らえる。

ミサゴの体型は、体長は♂50cm～♀64cm、尾長18～23cm、跗蹠5cm～6cm、脚の指を開いた時は8cmである。上記のミサゴの体長に基づき、魚の吻端(ふんたん)から尾ひれの付け根までを魚の体長として推定した。(図6)捕らえる魚は15cm～25cmの大きさの魚を多く捕食していた。捕食する魚の大きさは、その魚の生息数が多く、捕食が容易なことが考えられる。

V 今後の課題

ミサゴの終日観察をすると興味深い行動が観察される。ミサゴはどのような環境であれば生息可能なのか、繁殖活動には何が必要なのか、今後の観察で明らかにしていきたい。

フォトアルバム

近年のデジカメの普及により、野鳥たちをデジカメ等で記録している会員の方々も増えています。皆様の写真を募集しています。珍鳥や力作はもちろん、微笑ましい、楽しい写真、初々しい写真も大歓迎です。



アカツクシガモ
 撮影日時：2014年12月
 撮影場所：大河津分水
 撮影者：高辻 洋
 分水路の分岐点付近で他のカモたちと群れに混ざる



マガモ
 撮影日時：2015年2月13日
 撮影場所：鳥屋野潟
 撮影者：岡田成弘
 雌のパフ変個体



オジロワシ幼鳥
 撮影日時：2014年12月16日
 撮影場所：魚沼市
 撮影者：桑原 哲哉
 昨シーズンの初認。翌日から大雪で姿を見せず。残念。



ツクシガモ
 撮影日時：2014年11月30日
 撮影場所：上越市頸城平野
 撮影者：小林成光



ヒレンジャク
 撮影日時：2015年1月31日
 撮影場所：阿賀野市
 撮影者：岡田成弘
 ヤドリギの実を食べてフンをする瞬間

新潟県野鳥観察図鑑 vol.5

ホシムクドリ (*Sturnus vulgaris*) 英名: Common Starling

1 観察時期

新潟県では主に冬期に渡来し、ムクドリの群れの中に少数が観察されているが、生息数は少ない。国内では1969年に九州で観察され、近年は各地で単独または少数の群れが観察されている。

2 ホシムクドリの特徴

冬期に観察されるホシムクドリは、ムクドリより少し小さく、全身は黒色で緑色や紫色の光沢がわずかにあり、白い小さな斑が全身にある。嘴は細く黒色で、ムクドリとの識別に役立つ。

3 生息場所と観察方法

農耕地や市街地でムクドリの群内で行動しており、畜舎や堆肥の周囲で餌を採る姿が観察されている。

ムクドリの群れを丹念に観察することとなるが、少し離れていても、黒色味が有り、嘴が細い特徴で識別できるが、警戒心はやや強く近づきにくい。

4 新潟県での記録

県内各地で記録があるが、佐渡市での記録が多い。佐渡市では1987年10月に観察されており、これが新潟県での初記録である。1997年以降は観察記録が増え、2010年3月には9羽が観察されている。その後も2013年3月には6羽、2014年3月には5羽の観察記録がある。

上越市では2010年12月に最大4羽が観察され、2011年12月から2012年1月にかけて1羽が確認されている。

新潟市では佐渡周辺で2014年1月下旬から2月中旬にかけて2～3羽が観察され、今年も1月に1羽が同じ場所で確認されている。

今後も冬期に観察記録が増えていくと思われる。

5 国内での記録

日本鳥類目録では、北海道、本州、四国、九州や小笠原群島、琉球諸島など各地で迷鳥とされ、舩倉島と対馬では旅鳥とされている。

Strixに掲載された情報を見ると、11月から4月の記録が多く、繁殖した記録は見当たらない。

6 参考文献

日本鳥類目録改訂第5版(1974)補遺(第1回)・改訂第7版(2012)、Strix、佐渡島鳥類目録(日本野鳥の会佐渡支部2004)、いそひよ(日本野鳥の会佐渡支部報)、新潟県野鳥目録(日本野鳥の会新潟県支部2010)

なお大原淳一氏、小川龍司氏、高辻洋氏、吉川弘氏には、観察記録の提供にご協力をいただいた。

(写真・解説 伊藤浩)



新潟県愛鳥センター 平成 26 年度愛鳥講演会が行われる

事務局

新潟県愛鳥センターによる平成26年度愛鳥講演会・主催新潟県が11月23日(日)新潟県立生涯学習センター(新潟市)において開催されました。

今年のテーマは新潟県の鳥であるトキについてでした。トキ保護センター・野生復帰ステーションの本間穂積氏から「トキの保護増殖と野生復帰の取り組み」について発表がありました。本会の石部久会長からは「野生に生きるトキの行動生態と生息環境」について発表がありました。

石部久氏の講演内容を紹介します。



カエルを捕食するトキ

講演『野生に生きるトキの行動生態と生息環境』 日本野鳥の会新潟県 石部 久

トキが日本の空を飛ぶ

1981年1月。佐渡島に生息する5羽の野生のトキを一斉捕獲した。雌のキンと加えトキ6羽の人工飼育増殖が始まる。1998年、日本の環境省は、野生生物レッドデータ見直しで、トキを野生絶滅とした。2003年、日本産のトキ雌のキンが36歳で死んだ。2008年9月25日。野生復帰に向けて10羽のトキが放鳥。23年を経てトキが再び日本の空を飛ぶ。2012年、野生下でトキが自然繁殖。

トキは日本で野生絶滅

なぜトキは野生絶滅したのか 日本トキの生息の歴史と経緯は。
トキが絶滅したのは何故なのか 何が原因で自然から姿を消したのか。
トキの生息可能な条件と環境とはどのようなものか。

トキはどのような鳥なのか、野生に生きる行動生態を調べる

食べ物と採餌行動 トキは何をどのように食べるのか。
嘴の形態と採食方法 トキは嘴をどのように使って何を食べるのか。
生息環境と一年の行動 トキはどんな場所でどんな生活をしているのか。
サギなど他種との種間関係と捕食行動の違い。

放鳥トキや野生下生まれのトキで、海を渡り本州に飛来した個体の生息状況を調べる。

本州に渡ったトキは、生きるために食べ物を探し生活した環境はすべて水田環境。平野と低山が接する田んぼ、樹木が林立する丘陵と接する田んぼに限られている。

トキ個体は飛行した場所は各地異なるが、選択した環境はすべて田んぼである。

トキは田んぼのなかで生息するドジョウなど、動物質の生き物なんでも捕食する。見えない泥中に生息する生き物を捕食可能にするのが、トキの嘴の構造、半僕の足指である。日本産鳥類633種のなかで田んぼ構造の中から潜む生き物を捕りだし資源として生きる動物はトキが最高位。田んぼ構造の環境でトキは生態的地位を確立した鳥といえる。

トキ生息のため個体が生きる一日の必要食物量は300gといわれる。ドジョウに換算すると凡そ200匹といわれる。トキという種が生息するための必要環境構造は田んぼであり、田んぼのなかにトキの食べ物であるドジョウ、カエル、水生動物等の恒常的な生息が必須である。トキは田んぼ構造の環境でしか生きていくことができない動物である。

人と自然とトキと

日本は、弥生時代以来、農耕民族として米作りを中心に生きて社会を築いてきた。米は日本人が生きるに不可欠である。稲作は田んぼによって耕作されてきた。トキは、人々が耕作する田んぼに生態的地位をもつ日本人に最も身近な鳥として存在したのであろう。



ネズミを捕獲し、幼鳥に巢外給餌を行うトラフズク

平成26年度研究発表会「雪国の鳥を訪ねて」を1月18日(日)、新潟県立自然科学館(共催)において開催しました。今年度の発表は森林や平野、夜の猛禽類であるクマタカ・チョウゲンボウ・トラフズクについてです。

渡部通氏からは、クマタカの繁殖生態について発表がありました。調査結果からは営巣木の種類や高さ、形など、東蒲原に生息するクマタカの詳しい営巣条件がわかりました。また、子育て中にヒナが巣から落ちたケースでは、その後ヒナが成長する姿に感動を覚えるとともに、クマタカの厳しい繁殖の実態を理解することができました。

岡田成弘氏からは、西蒲原・新潟市におけるトラフズクの雌雄や年齢の識別、食性、捕食行動、ねぐら場所の条件などについて発表がありました。また、田園地帯と屋敷林を生息環境として繁殖していたトラフズクが、屋敷林の減少という環境の変化によって姿が見られなくなり、木々が生長した鳥屋野潟公園周辺で繁殖活動が見られ始めたことなど、25年間継続した貴重な研究成果を知ることができました。

石部久氏からは、都市の生活環境に適応して生きるチョウゲンボウの繁殖生態について発表がありました。チョウゲンボウ本来の生息場所が山間部の崖であること、新潟平野に広がる田園地帯で餌を採り、新幹線の高架橋や学校の校舎などを利用し繁殖していることなど、都市環境に適応して生息地を広げるチョウゲンボウのたくましい姿を知ることができました。

3人の研究発表から、生態系の頂点に位置する猛禽類の生態の一端を知るとともに、鳥が生きるための生息条件とは何かをあらためて考える良い機会となりました。

厳冬の寺泊海鳥探鳥会

報告



波間に浮かぶウミアイサの雄と雌



岩場で休むウミウたち

厳冬の寺泊海鳥探鳥会が2月1日(日)に行われました。野鳥の会の行事の中でも長年愛され、30年以上続く探鳥会です。

寺泊文化センターに集合して探鳥地の様子、日程等確認の後、車に分乗して寺泊港へ行きました。寺泊港では、スズガモの群れやカムリカイツブリ、イソヒヨドリなどを観察しました。

寺泊水族館と出雲崎港ではセグロカモメやオオセ

グロカモメ、ウミアイサ、などをじっくり観察しました。青空が見える天候でしたが、海からの強風が吹き、文字通り厳寒の探鳥会となりました。会場に戻り参加者22名で温かいタラ汁で昼食をとりました。

鳥合わせ(観察された鳥の確認)で27種類の鳥を確認しました。各地の鳥の情報交換ができ、みなさんの興味深い貴重な話を聞くことができました。

新潟県探鳥地ガイド 雪国の鳥をたずねて

佐潟 ～ラムサール条約湿地～



蓮の茎にとまるカワセミ

佐潟は、新潟市西区の南西に位置し1996年、国内で10番目のラムサール条約湿地に登録となりました。湿地面積は76ha、このうち水域は43.6haです。大きな下潟(したかた)と小さな上潟(うわかた)の大小2つの潟から成り立ち水深は平均1m程度と浅く、湖底は船底型をしています。

佐潟は国内最大の「砂丘湖」といわれています。日本海沿いに新潟砂丘があり、その砂丘列間の窪地に水がたまったものです。外部から流入する河川はなく、水源は周辺砂丘に降る雨が地下水として湧出し、佐潟を涵養しています。

水質は、淡水で窒素やリンなどの栄養塩類が多く、富栄養湖に分類されています。

歴史を振り返ると江戸時代には「鳥役」(狩猟に税金)、明治時代では蓮根組合が存在したなど、地域を中心とした人の関わりがありました。1970年代までは現在ヨシ原になっている潟岸は田んぼとして利用されており水路もありました。潟の中には舟が行き来する舟道があり、住民あげての潟の維持活動「潟普請」が行われていました。また、湖底の泥を鋤簾で掻き揚げ舟で潟岸の田んぼへ肥料として運び入れるなど結果として保全活動がなされてきました。高度成長期からの社会環境の変化から佐潟の人の関わりも変化して、住民の直接的な関わりが薄れる

中、佐潟の公園化、ラムサール条約の登録と歩んできました。ほぼ同時に富栄養化など水質の悪化、ヘドロ状の堆積など様々な課題に対し、新潟市は佐潟周辺自然環境保全計画を策定、行政、地域、NPOなどが連携し保全・ワイズユースの推進に取り組んでいます。佐潟の持つ歴史と文化を活かした新たな保全の姿にラムサール関係者からも注目が寄せられています。

日本海に近く畑の広がる砂丘列、樹林帯とヨシ原のある水辺環境に加え、里山的な人との関わりもあり多様な豊かな自然が残されています。これまで200種を超える野鳥が観察され、3000羽を超えるコハクチョウが越冬するなどガンカモ類の飛来数は国内有数です。優占種はマガモ、コガモです。このほかオナガガモやホシハジロ、キンクロハジロ、ヒドリガモ、ヒシクイ、ミコアイサ、トモエガモも確認できます。

猛禽類はオオタカやハヤブサ、ノスリ、チュウヒそしてオジロワシがカモを狙います。珍鳥では、2004年夏にシロハラクイナの繁殖、2007年にはアオハクガン、サンカノゴイなどが観察されています。

環境省の佐潟水鳥・湿地センターや野鳥観察舎・潟見鳥を拠点とした佐潟一周がおすすめです。

(佐藤安男)



冬の佐潟とコハクチョウの群れ

発行 2015年3月10日 No.79

発行人 石部 久 編集者 小林成光、千葉 晃

日本野鳥の会新潟県

事務局 〒950-0941 新潟市中央区女池3丁目13番25号

TEL 025-285-2405 本間由紀子方 〈振替口座〉00610-1-6002